上がGM鮭

遺伝子組み換え問

GM動物、体細胞クローン家畜、生物多様性

食と農から生物多様性を考える市民ネットワーク設立総会

市民の手で守ろう！地球の生物多様性

２００９年５月23日、名古屋市中区役所ホールで「食と農から生物多様性を考える市民ネットワーク」（以下ＭＯＰ５市民ネット）設立総会と学習会が開催され、共に運動を担う全国の仲間ら約２００人（グリーンコープからは組合員・事務局14人）が参集しました。

午前はＭＯＰ５市民ネット立ち上げ集会。２０１０年名古屋市で開催される国際会議「ＣＯＰ10[※1]／ＭＯＰ５[※2]」に照準を合わせ、世界の消費者・農家と共に食と農を自分たちの手に取り戻し、生物多様性を守ることを目的に設立されました。

今後、「ＧＭ生物が人の健康・農業・環境に及ぼす影響を明らかにして広く知らせていく」「ＣＯＰ10／ＭＯＰ５に向け市民レベルの政策提言を行う」「規制の役割をしていないカルタヘナ国内法の改正を求める」「ＣＯＰ10の争点の『ＡＢＳ（遺伝資源へのアクセスと利益配分）』とＭＯＰ５の争点の『責任と修復』を有効なものにするよう働きかける」「国内外の団体や人々と共同でイベント・集会を開催する」ことなどを柱に同じ目的を持った団体と共に運動をすすめていきます。とりわけ「生物多様性条約市民ネットワーク」と連携・協力していくことになりました。

午後からは、生物多様性と遺伝子組み換えについて、基礎から学びました。講師の一人・道家哲平さん（財団法人日本自然保護協会）は、「地球上の生命を守る『生物多様性条約』とは」と題した講演の中で、「生物多様性とはすべての生命の多様さとそれらがつながりを持っていることを言う。私たちの暮らしはそんな生物多様性の恵みを利用することで成り立っている。それを守ることが、私たちの暮らしを守ることである。生物多様性条約は世界的に最も開かれた条約と言われており、私たち市民の生き方の問題と結びついている」と話しました。

MOP5市民ネット立ち上げ集会の参加団体リレートークでグリーンコープのストップＧＭの取り組み姿勢をアピールする田中共同体代表理事

天笠啓祐さんからは「食と農の安全を守る『カルタヘナ議定書』とは」と題し、「ＧＭ作物による生態系・生物多様性への影響として、殺虫性作物・耐性害虫の拡大、除草剤耐性作物・耐性雑草の拡大、野生植物・原生種汚染、昆虫の寿命等への影響、家畜への影響、未承認作物の交雑・混入、ＧＭ動物の影響など遺伝子組み換えと生物多様性との関係について話がありました。

河田昌東さん（遺伝子組み換え食品を考える中部の会）からは、「くらしにしのびよる遺伝子組み換え生物」と題した講演がありました。「河川敷で野生種の近くにＧＭ西洋ナタネの自生とその汚染が拡大している」「花粉による野生種や栽培作物へのＧＭ遺伝子の侵入は、自然界に存在する種の壁を壊すことにつながる」「ＧＭ動物が自然界に逃げ出せば、植物とは比較にならない速さでＧＭ遺伝子が拡散し、天然種への影響は計り知れない」など、活動から見えてくる問題点についての指摘がありました。

今後ＭＯＰ５市民ネットは、生物多様性を大きく「生態系」「種」「遺伝子」という視点から捉え、取り組みを展開していくことになります。なお、今年10月にドイツの環境保護活動家クリスティーヌ・フォン・ヴァイツゼッカーさんを迎えての集会、２０１０年５月には「生物多様性の日集会」が予定されています。

※1 生物多様性条約第10回締約国会議
※2 カルタヘナ議定書第５回締約国会議

GMOフリーゾーン世界をめざして頑張ろう!!

GMOフリーゾーン欧州会議

グリーンコープかごしま生協　理事長　川原　ひろみ

２００９年４月24～25日、スイスの古都ルツェルンで開催されたＧＭＯフリーゾーン欧州会議に参加しました。

この会議は、各国でＧＭＯフリーゾーンに取り組む人たちが集まり、その取り組みのようすを報告し、それぞれの運動を世界中の人たちに伝え連帯を深めることを目的としています。私は、ストップ！ＧＭＯ連絡協議会を構成する生協のメンバーとして、日本での自生ＧＭナタネの状況報告から見える汚染の実態と、３月14日宮崎県綾町で行われた「ＧＭＯフリーゾーン全国交流集会」のようすを報告しました。

今回の欧州会議は、ＥＵに加盟せずＧＭＯフリーを国民投票で決めた民主主義の極致とでもいうような素晴らしい国スイスで「食と民主主義」をテーマに開催。世界中から集まった約３００人がセッションに参加しました。

スイスでは「ＧＭＯフリーゾーン運動」が積極的にすすめられており、４つのカントン（日本の都道府県にあたる）でＧＭ作物の商業栽培が禁止され、輸入される食品や作物は99％が、市場は１００％がＧＭＯフリーです。さらに、有機農家の比率が世界で最も高く、消費者の有機農業への強い支持がＧＭＯフリー国家をもたらしていると言えます。

近隣のチェコは、国としては遺伝子組み換えを推奨していますが、国の方針とは別に地方自治体に決定権があることから現実にはほとんどの自治体が反対しているのだそうです。他のヨーロッパメンバーは「遺伝子組み換えは飼料であっても表示すべきである」、スイスの科学者は「植物にも魂があるので人間の勝手で操作するのはいけない」など、それぞれに訴えました。その他にも、農民同盟代表、大豆取引コンサルタント、運動をすすめる市民団体などから報告がありました。

セッションの合間にあるコーヒーブレイクや夜の交流会では、おいしい食事を囲み、さまざまな国の言葉で、参加者同士が必死に身振り手振りで交流しました。国や人種が違っても、同じ場で、同じ思いで、同じ時を過ごし、何の垣根もなく、言葉の壁さえも取り払われ交流することができる、そんな素敵な空間が自然に生まれ、とても居心地のよい時間となりました。

世界に私たちと同じ思いの仲間がいて、今日も明日も明後日も頑張っている。そんなことが何より実感でき、「ＧＭＯフリーの世界をめざしてもっともっと頑張らなければいけない」、そんな気持ちが自然に湧き上がり、元気と勇気をもらった２日間でした。